

一九九三年度

大学院文学研究科
中国研究科修士論文目錄
文学部卒業論文目錄
文学会賞授賞卒業論文要旨

愛知大學文學會

一九九三年度大学院 文学研究科 中国研究科 修士論文目録

文学研究科

日本文化専攻

- 佃 隆一郎 地方新聞と「国防」——宇垣軍縮から満州事変までの豊橋日日新聞を中心に——
藤原 理恵 谷崎潤一郎論——虚構と美——
丹 美 幸 『青猫』論
柳 麗 艶 中日両国西洋議会制度についての知識の比較

地域社会システム専攻

- 塚 本 善 弘 地域政策の「公共性」と住民の主体性形成

欧米文化専攻

- 川 名 真 弓 A Study of Celtic Image in Gwenevere
権 田 研 亮 English Education as a Foreign Language in Japan—Globalization & Crosscultural Communication—

- 齊藤佳子 “Father and Son” as Seen in Lewis Carroll—How Was his Nonsense Born?—
 ミシユル・セール中期の批評作品における「モトウール」概念の展開
- 清水高志 A Study of the Reading Competence of Students in Classroom
- 福田博 A Study of Genius loci in *A Passage to India*
- 永井恒子 Ferdinand de Saussure の言語理論における Signe の意義について
- 前田豊子

中国研究科

中国研究専攻（文学会関係のみ）

鈴木敬子 大同思想と理想社会——康有為の大同思想を中心として——

一九九三年度文学部卒業論文目録

哲 学 科

東洋哲学専修

- | | | | | | |
|--------|---------|-----------------------|--------|---------|-----------------------------|
| 九〇P四〇二 | 岩 川 さゆり | 中国における「食」に内在する「医」 | 九〇P四〇四 | 岡 本 剛 | ハイデガーにおける自己存在について |
| 九〇P四〇六 | 大 島 一 郎 | 中国人の死生観について | 九〇P四〇六 | 梶 浦 有一郎 | 「ワイトゲンシュタインのパラドックス」をめぐるについて |
| 九〇P四〇七 | 小 田 伸 | 『論語』中の孔子の君子観 | 九〇P四〇七 | 菊 池 美和子 | ハイデガーにおける言葉について |
| 九〇P四〇九 | 加 藤 弘 恵 | 漢字の起源について | 九〇P四〇八 | 北 野 節 子 | ベルクソンの芸術観 |
| 九〇P四一三 | 近 藤 浩 之 | 儒教の孝——原始儒家より孝経の成立まで—— | 九〇P四〇九 | 桑 原 純 子 | サルトルにおける自己と他者 |
| 九〇P四一五 | 齊 藤 正 高 | 方以智の物理思想 | 九〇P四一〇 | 榑 原 裕 隆 | ショーペンハウアーの世界観 |
| 九〇P四一六 | 谷 口 留美子 | 「こころについて」 | 九〇P四一一 | 澤 田 元 | バルトにおけるモードの記号学的分析 |
| 九〇P四一九 | 野見山 剛 | 『中庸』と『呂氏春秋』の中の思想 | 九〇P四一二 | 田 有 紀 | ニーチェにおけるニヒリズムの克服 |
| 九〇P四二五 | 長谷川 慎 吾 | 嵇康の志について | 九〇P四一三 | 島 田 有 紀 | ニーチェにおけるニヒリズムの克服 |
| 八九P四〇六 | 伊 藤 康 浩 | 「カースト制度について」 | 九〇P四一三 | 杉 浦 靖 史 | ハイデガーにおける歴史性について |
| 八八P四〇〇 | 斉 藤 まり | 朱子の理気説について | 九〇P四一四 | 轟 木 悟 | ハイデガーにおける不安について |
| 九〇P四〇一 | 市 川 陽 介 | サルトルにおける人間の自由について | | | |

社会学科

社会学専修

- | | | | | | |
|--------|------|--------------------------|--------|-------|--------------------------------|
| 九〇P四二五 | 中矢紀子 | ニーチエの超人思想について | 九〇S五〇一 | 荒川国博 | 人間の攻撃性に関する考察 |
| 九〇P四二六 | 平松誠司 | ハイデッガーにおける死について | 九〇S五〇二 | 伊藤美鈴 | 「J」フマン研究」 |
| 九〇P四二七 | 平松良子 | ルソーの「エミール」における人間と社会の関わり | 九〇S五〇三 | 後道やよい | 文化としての家族 |
| 九〇P四二九 | 村井政子 | ハイデッガーにおける死へとかかわる存在について | 九〇S五〇四 | 加藤佐知子 | 社会的なるものと宗教的なるもの |
| 九〇P四三〇 | 村瀬義樹 | ルソーにおける「自由と平等」について | 九〇S五〇五 | 加藤隆弘 | 「自」実現と労働」 |
| 九〇P四三二 | 山田桂子 | カントの自由概念について | 九〇S五〇六 | 神田和哉 | 国際化と日本の民族問題 |
| 九〇P四三三 | 山田達也 | コントにおける実証主義と形而上学 | 九〇S五〇七 | 小早川真治 | 学歴主義の病理——学歴と産業構造の一考察—— |
| 九〇P四三四 | 加藤憲夫 | ニーチエにおけるニヒリズムとその自己克服について | 九〇S五〇八 | 小室勝幸 | 現代の教師像と学校教育 |
| 九〇P四三五 | 都竹信也 | カントにおける美的判断について | 九〇S五〇九 | 五島知子 | 文化の差異性——文化分析的視点より—— |
| 九〇P四三三 | 石原武彦 | カントにおける美の問題について | 九〇S五一一 | 桜井元子 | 適応とストレス |
| 九〇P四三六 | 小林一江 | デカルトにおける人間機械論 | 九〇S五〇二 | 杉浦友昭 | 女性差別についての社会学的考察——フェミニズムの視点から—— |
| 九〇P四三五 | 谷口康吏 | ヘーゲルの国家論について | 九〇S五〇三 | 鈴木巨 | 「過労死と企業の関連」 |
| 九〇P四三六 | 大山忍 | メルロ・ポンティにおける言葉の問題 | 九〇S五〇四 | 高橋洋 | 学習指導要領と教育における人材観について |
| 九〇P四三六 | 堀脇宏之 | プラトンの言語哲学について | 九〇S五〇七 | 田中智久 | 家制度の変化と現代家族の諸 |

問題について

九〇S五二八 田中美加 家族関係の役割論とその問題

性

九〇S五二九 土屋貴之 学歴社会とその変革の可能性

九〇S五三〇 手島有紀 乳幼児期経験と人格形成——母性的養育の問題をめぐって——

九〇S五二二 殿守宏美 非行性の心理

九〇S五三三 中川英二 学校5日制の実施による子ども

もの生活の変化

九〇S五二四 中島慎太郎 日本人の余暇——その現状と

展望——

九〇S五二五 中筋伸矢 地域社会計画の現状と課題

——国土計画の変遷と展望——

九〇S五二七 丹羽正和 労働における疎外の現状と課

題

九〇S五二八 原亜希子 外国人労働者と日本社会

九〇S五二九 伴巨裕 日本の学歴社会に関する一考

察

九〇S五三〇 坂野嘉昭 現代の日本政治からみる政治

文化

九〇S五三二 深谷径弘 健康都市づくりにおける住民

参加の役割

九〇S五三三 福田和歌子 現代社会における消費生活の

構造的変化——サービスへの消費の増大——

九〇S五三四 村松美菜子 老いの心性——エリクソンの

研究から——

九〇S五三五 森藤直正 高校中退者問題とその対応策

九〇S五三六 渡邊智明 現代の学校における管理教育

に関する諸問題

八〇S五〇五 内田裕司 部落解放問題における差別形

成と社会教育の問題

応用社会学専修

九〇S五〇一 阿部尚生 スウェーデンの福祉体制につ

いて

九〇S五〇二 新木直美 ごみ問題に関する一考察

九〇S五〇三 稲場敬子 中流階層とその生活意識

九〇S五〇五 梅本泰代 受験競争社会と青少年に関する一考察

九〇S五〇六 大橋真樹子 現代社会における余暇のあり

方に関する一考察

九〇S五〇八 加藤勝美 国家と民族——旧ソ連を通し

て——

九〇S五〇九 神谷実 過熱報道に関する一考察

九〇S五二〇 河野泰久 「ゴミとエコロジー——社会

的ジレンマ論の視点から——」

九〇S五二一 後藤 大互 女性労働と差別

九〇S五二二 後藤 英雄 長良川河口堰問題に関する一考察

九〇S五二三 篠田 純子 神谷美恵子研究

九〇S五二五 杉浦 正彦 現代の子どもの遊びに関する一考察

九〇S五二七 土屋 宣幸 老いと社会保障制度

九〇S五二八 寺岡 洋一 戦後日本人の価値観の変遷

九〇S五二九 友田 史穂 不登校についての心理学的研究

九〇S五三〇 内藤 博充 日本における労働時間短縮問題

九〇S五三一 中島 史朗 社会的弱者とソーシャルネットワーク

九〇S五三三 中嶋 由美 高齢者の介護問題——家族依存から老後の自立へ——

九〇S五三六 濱田 宏史 オールポートのパーソナリティ論——人間理解のために——

九〇S五三七 平野 隆司 行動規範と逸脱に関する一考察

九〇S五三八 平林 健司 消費生活とゴミ

九〇S五三〇 藤田 智行 名古屋市のゴミ問題を中心にして——使い捨て社会からリサ

九〇S五三三 堀井 己奈代 イクル社会へ——

九〇S五三三 堀井 己奈代 家族の機能の変化と消費社会に関する一考察

九〇S五三三 村田 幹彦 高齢者と家族介護をめぐる諸問題

九〇S五三六 横井 孝子 ゆとりある教育と学校5日制の問題をめぐる

九〇S五三八 宮澤 緑 遊・非行・俗

九〇S五三九 荒川 美保 親子関係にみる団塊の世代

九〇S五四〇 池辺 聡子 現代社会における家族のライフスタイルの変容

九〇S五四一 川口 真代 第一次社会化と学校

八九S五二四 彦坂 英明 児童手当法にみられる日本の人口政策

八九S五三三 鈴木 淳史 性役割と性差別

八九S五三四 岡本 朋子 エロスの意識について

史 学 科

九〇H六〇一 栗田 博和 熱田神宮と角田忠行——角田忠行日記を中心に——

九〇H六〇二 伊藤 栄一 三州渥美郡東植田村における年貢の変遷について

九〇H〇〇三 伊藤 祐司 円覚寺領尾張国富田庄に関する一考察

九〇H〇〇四 井戸 幸一 「皇子宮」についての一考察——皇太子制に関わる島宮を中心として——

九〇H〇〇五 植田 一平 室町時代の魚座について

九〇H〇〇六 川上 博 班田制に関する一・三の覚書

九〇H〇〇七 川中子 路子 幕末地方文化人の交遊関係——酒井利亮を中心に——

九〇H〇〇八 木村 賢司 伊勢国智積御厨について

九〇H〇〇九 倉田 幸佳 古代の後宮について

九〇H〇一〇 倉八 伸行 和泉国近木庄について

九〇H〇一一 小林 紀子 「長屋王家木簡」と家政機関について

九〇H〇一二 榊原 奈美 大和国平野殿庄について

九〇H〇一三 佐藤 剛 日本古代の賑給について

九〇H〇一四 澤田 育代 信濃国大田庄における島津氏の在り方

九〇H〇一五 柴田 明子 六波羅探題について

九〇H〇一六 下里 智美 女帝についての一考察

九〇H〇一七 杉山 智美 関口隆吉について——地方巡察と三新法改正を中心にして——

九〇H〇一八 須崎 三代 平安時代の儀式についての一考察

九〇H〇一九 堅谷 光一 日本古代の都城について

九〇H〇二〇 花井 基伸 尾張国安食荘について

九〇H〇二一 福岡 輝代 備後国太田庄における三善氏の支配について

九〇H〇二二 古里 麻紀 豊後国大野庄について

九〇H〇二三 武馬 利江 尾張地方における蘭学の系譜について

九〇H〇二四 宮木 麻子 天保年間から嘉永年間における禁制と農民——遠州長上郡有玉下村高林家文書より——

九〇H〇二五 片島 正義 蘇我氏についての研究

九〇H〇二六 則武 航自 国人層と国人領主制

九〇H〇二七 小島 正嘉 明治期愛知県における私設鉄道計画について

九〇H〇二八 石川 珠江 フィリピン革命とボニファシオ

九〇H〇二九 今津 正弘 日本敗戦直後のマラヤにおける華僑

九〇H〇三〇 大関 洋 分離独立期のテーランガーナ

東洋史専修

- 九〇H六〇四 岡本幸代 關争 唐代僧官制に見られる仏教政策について
 九〇H六〇五 壁谷愛子 元朝末期の交鈔発行と社会状況
 九〇H六〇六 川嶋康貴 義和団運動——その出自と性格——
 九〇H六〇七 木村芳乃 一七〇〇年前後のインドのパールシーについて
 九〇H六〇八 越野政則 南宋の紙幣「見銭公據」について
 九〇H六〇九 高田裕司 五代十国時代南平国の生存戦略
 九〇H六一〇 高橋瑞明 春秋戦国時代における淳于髡の役割について
 九〇H六一一 佳保里 英国の中東政策
 九〇H六一二 丹後学 檀淵の盟約 真宗はなぜ和約の道を選んだか
 九〇H六一三 趙知香 独立協会の思想——一九世紀末朝鮮の国政改革運動——
 九〇H六一四 泊英功 晏子に対する司馬遷の思慕について
 九〇H六一五 中山寛史 洪秀全の夢について
 九〇H六一六 加藤彰子 英領インドにおけるサテイー禁止令について
 九〇H六一七 野本知永 秦王李世民と皇太子建成
 九〇H六一八 長谷勝 王莽の経済政策について
 九〇H六一九 福田由紀 日本軍政下フイリピンにおける抗日運動について
 九〇H六二〇 藤井順子 清朝中期における西南少数民族の統治政策について
 九〇H六二一 本庄喜美代 義和団運動について
 九〇H六二二 増田依子 フビライ治下の科挙政策について
 九〇H六二三 山内忠仁 明代江南における水利慣行
 九〇H六二四 吉村晃子 ホセ・リサールについて——ホセ・リサールの思想的営為について——
 九〇H六二五 武内祥子 明代の茶業と農民反乱
 九〇H六二六 永田幸子 宋代の景德鎮窯における瓷器の発展について
 九〇H六二七 成田崇紀 フイリピン大衆音楽の変遷
 九〇H六二八 岩谷英明 地理学専修 日本海縦貫線における優等列車の変遷
 九〇H六二九 梅本美佳 中国の乾燥地域における強風

について

九〇H六三〇三 江原昌則 新幹線三河安城駅の開設とその評価

九〇H六三〇四 大竹隆介 地方都市におけるレジャー施設の集客力に関する一考察

——愛知県豊橋市「のんほいパーク」を例として——

九〇H六三〇五 大多和淳史 焼津市における身近な憩いの場について——幼児の散歩や遠足の分析より——

九〇H六三〇六 加藤武司 名古屋市における地下街の形態とその機能

九〇H六三〇七 加藤美穂 名古屋における駐車場の立地とその問題点

九〇H六三〇八 金田弘一 零細食品小売業の地域的分布変動——宮市を事例として——

九〇H六三〇九 児玉秀幸 豊橋市における大型店舗の進出立地と消費者行動

九〇H六三一一 後藤順子 中部の国内航空貨物流動の実態

九〇H六三一二 酒井寛 一宮と岐阜羽島における繊維卸団地の形成と現況

九〇H六三二三 柴田太 西三河の中心地と中心地シス

テムの研究

九〇H六三二四 杉浦顕倫 地方私鉄の存立条件について

九〇H六三二五 高橋貴 里サイクル社会の現状と展望

九〇H六三二七 竹本美幸 豊橋市街地における道路網の変遷

九〇H六三二八 中村昇司 静岡県焼津市における水産物流通網の研究

九〇H六三二九 波多野敬子 水田における水質浄化について

九〇H六三三〇 林寛之 名古屋市における港湾地区の再開発について

九〇H六三三一 古家孝浩 降水の水質におよぼす幹線道路と樹木の影響について

九〇H六三三二 松山浩久 豊川最上流域における水質について

九〇H六三三五 山下浩司 奥浜名におけるリゾート開発と問題点

九〇H六三三七 山田一夫 奥三河の観光地に対する地元住民の評価

九〇H六三三八 横地信貴 名古屋市における喫茶店経営とその周囲の及ぼす影響

九〇H六三三九 脇田千香子 岐阜市における観光の地理学的考察——長良川温泉を中心

にして――

八九H三〇七 酒向直樹 岐阜県美濃加茂市の果樹栽培地域について

八九H三〇八 杉本孝光 東海三県におけるゴルフ場の分布特性

八九H三二五 菱田知己 名古屋市内におけるゴミ処理場の変遷について

八九H三〇四 片山敬治 天津市における自由市場と野菜流通の変遷

文学科

国文学専修

六〇L七〇一 朝倉美和 井上靖『水壁』

六〇L七〇二 石橋誠 『西行の自歌合』

六〇L七〇四 今井章乃 『好色一代男』の研究

六〇L七〇六 今村美保 『たけくらべ』について――子供の世界――

六〇L七〇七 岩瀬弥生 与謝野晶子『みだれ髪』論

六〇L七〇八 内田史子 芥川龍之介『奉教人の死』論

六〇L七〇九 太田賀一 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』論

六〇L七一〇 大橋久美 森鷗外『雁』について

六〇L七一 大森文江 『源氏物語』における「をさなし」の研究

六〇L七〇三 小野亮 太宰治の文体について

六〇L七〇四 加藤直之 渥美半島における方言「ナンバ」の考察――対象物の地域差――

六〇L七〇五 金谷ゆかり 明治新成語の研究

六〇L七〇七 河合千鶴 芥川龍之介『藪の中』論

六〇L七〇八 川崎徹雄 歴史物語と説話集との関係について

六〇L七〇九 北井麻希子 太宰治『斜陽』――かず子の恋について――

六〇L七〇三 小出珠路 源氏物語の研究――無彩色の服色を中心に――

六〇L七〇三 児玉和久 樋口一葉『十三夜』における『見染め』について

六〇L七〇四 小林奈津子 夏目漱石『こゝろ』論――先生の死の意味――

六〇L七〇五 御領靖 芥川龍之介『地獄変』論

六〇L七〇六 佐伯美奈子 万葉集 大伴家持の研究

六〇L七〇七 榎原雅子 古今和歌集 春歌について

六〇L七〇八 佐藤綾子 『大鏡』における宿世と人生姿勢

六〇L七〇九 佐野恵実子 『稚児物』の研究

六〇L七〇〇 清水綾乃 志賀直哉『城の崎にて』論

- 九〇七〇三 杉森 智子 源氏物語の研究——装束と服色についての一考察——
- 九〇七〇四 鈴木 里香 狐の怪婚譚について——『狐の草子』考——
- 九〇七〇六 樽田 政子 渥美半島の方言研究——陸路と海路からの伝播を中心に——
- 九〇七〇七 辻 香子 二人妻説話の研究——「さいき」考——
- 九〇七〇八 辻井 栄美 平安文学における「わぶ」・「わびし」の研究——源氏物語を中心に——
- 九〇七〇九 豊田 昌弘 遠藤周作「沈黙」について
- 九〇七一〇 豊田 有紀 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論
- 九〇七一一 中根 千佐 源氏物語における色彩表現——紫式部の配色手法——
- 九〇七一二 野村 亜希子 北杜夫の「幽霊」論——自己形成としての「幽霊」——
- 九〇七一三 長谷川 るみ 蜻蛉日記の研究
- 九〇七一四 林 久人 芥川龍之介「秋」〈信子の世界〉の成立とその崩壊を通して描かれる信子の寂しさの追求
- 九〇七一五 日高 美也子 『よさやき竹』の研究
- 九〇七一六 樋野 朗子 太宰治「斜陽」論
- 九〇七一七 広瀬 英史 源氏物語における処遇・後見の表現——「かしづく」「育む」「後見る」「生ほしたつ」「扱ふ」について——
- 九〇七一八 堀口 祐子 坂口安吾「白痴」論
- 九〇七一九 光本 幸子 谷崎潤一郎「春琴抄」論
- 九〇七二〇 三輪 修久 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論
- 九〇七二一 森口 由紀 源氏物語における「あはれ」の研究
- 九〇七二二 薮野 智栄子 『讃岐典侍日記』の研究
- 九〇七二三 山内 真紀子 「さうざうし」「さびし」「わびし」の研究「源氏物語」を中心に
- 九〇七二四 山岸 正枝 落窪物語の研究
- 九〇七二五 山本 尚 樋口一葉「たけくらべ」作品後半における美登利の変化について
- 九〇七二六 山本 華 樋口一葉「われから」論
- 九〇七二七 湯 浩一 秋成の儒・仏二教観
- 九〇七二八 横内 洋 遠藤周作「沈黙」論
- 九〇七二九 渡邊 信子 梶井基次郎「冬の蠅」論
- 九〇七三〇 渡邊 則子 「男衾三郎絵詞」の研究

九〇七〇三 阮 毅 芥川龍之介「藪の中」論

九〇七〇四 葛 甬 君 高崎藤村「破壊」論

九〇七〇五 杉 浦 かな子 「玄鶴山房」芥川龍之介

九〇七〇六 山 口 希 萩原朔太郎「月に吠える」に

九〇七〇七 山 本 奈美子 夏目漱石「こゝろ」について

九〇七〇八 山 本 容子 志賀直哉研究「暗夜行路」を

九〇七〇九 川 北 准也 夏目漱石「それから」論

九〇七一〇 水 谷 昌久 夏目漱石作「こゝろ」論

九〇七一〇 赤 田 耕 策 エミリー・ブロンテの『嵐が

九〇七一一 石 川 玲 子 *Wuthering Heights* における

九〇七一二 伊 藤 美 晴 *Wuthering Heights* における

九〇七一三 猪 野 恵 也 JOHN KEATS の詩論研究

九〇七一四 宇 野 真由美 *Imagination の考察*

九〇七一五 宇 野 真由美 *Dickens 論* —— *「A CHRISTMAS CAROL」* における精霊た

ち —— 『嵐が丘』におけるネリーの

九〇七二〇 大 菅 美 幸 『嵐が丘』におけるネリーの

九〇七二一 太 田 尚 宏 A study of Keats

九〇七二二 岡 崎 雅 之 A STUDY OF COLERIDGE

九〇七二三 奥 雅 衣 *The Ancient Mariner* におけ

九〇七二四 小 関 久美子 ジョージ・エリオットの

九〇七二五 加 藤 晴 子 *Silas Marner* —— *Silas Marner*

九〇七二六 川 合 良 朋 の愛について ——

九〇七二七 小 関 久美子 『嵐が丘』における愛とその

九〇七二八 加 藤 晴 子 『嵐が丘』における脇役ネリー

九〇七二九 川 合 良 朋 A STUDY OF COLERIDGE

九〇七三〇 木 全 健 二 *The Ancient Mariner* にみえ

九〇七三一 小 藤 潤 情景 ——

九〇七三二 後 藤 貴 子 *ディケンズ論*

九〇七三三 佐 藤 裕 二 A Study of Japanese English

九〇七三四 塩 谷 高 久 Education

九〇七三五 後 藤 貴 子 Dickens 論 『Christmas Carol』

九〇七三六 佐 藤 裕 二 Charles Dickens 論

九〇七三七 塩 谷 高 久 Charles Dickens 論

- 九〇七三四 武田 朋子 Ceditability of American English
 九〇七三五 竹好 紀子 Wordsworth の詩について (Wordsworth の詩中の死について)
 九〇七三七 鶴見 奈緒子 『風が丘』におけるエドガー・リントンの主観的解釈
 九〇七三六 外山 広美 C. Dickens 論
 九〇七三〇 延原 達弥 Innovations in Johnson's English Dictionary
 九〇七三三 長谷川 雪枝 『風が丘』における自然描写の役割
 九〇七三四 伴 尚美 Phonetics of English
 九〇七三五 平井 雅子 DICKENS 論——明暗の fan-tasy の探求——
 九〇七三二 平井 陽子 *The Ancient Mariner* 研究——作品の構成と視点について
 九〇七三三 平松 正 『風が丘』に見られる象徴について
 九〇七三六 前田 康之 Charles Dickens 論
 九〇七三九 松本 昌平 『風が丘』——ヒースクリフの空白の時間について——
 九〇七四〇 宮原 正明 『風ヶ丘』について——登場人物における社会性・非社会性——
 九〇七四一 宮本 敬広 C. Dickens 著「大いなる遺産」について
 九〇七四三 村上 真樹子 デイクেনズ論——彼の描いた子供像——
 九〇七四四 森 恭子 A Study of Wordsworth's poems
 九〇七四五 八木 千穂 A Study of "The Fall of Hyperion" by John Keats
 九〇七四六 山口 裕代 Charles Dickens の研究——A Christmas Carol について——
 九〇七四七 山田 直子 Charles Dickens の作品について——Christmas Spirits とイブ——
 九〇七四八 山田 紀子 エミリー・ブロンテの『風が丘』における台所の役割について
 九〇七五〇 山本 暢子 ON ENGLISH EDUCATION A Study of William Wordsworth
 九〇七五一 山本 昌弘 Foreign Language Acquisition of Japanese and the Improvement of English Education

- 九〇七五五 禹(山本)実幸 *Thomas Hardy* 論
 TO-INFINITIVE AND GERUND
 九〇七五三 吉村直樹 A Study of Lexical Classes
 九〇七五二 岡本真紀 DIFFERENCES BETWEEN
 九〇七五五 菅沼好崇 ENGLISH AND JAPANESE
 WAYS OF THINKING
 九〇七五六 丹下敦子 Emily Brontë の *Wuthering
 Heights* のビースクリフの憎
 しみについて
 九〇七五七 東野由紀子 George Eliot 論——彼女の真
 の意図——
 History and Changes of En-
 glish Prepositions
 九〇七五八 堀尾紀代美 『嵐ヶ丘』における愛憎につ
 いて
 English Accent and Intona-
 tion
 九〇七五九 鈴木ユキ ジョン・アーヴィング論——
 ガープの見た世界とアーヴィン
 グ——
 ハーデイ著『テス』について
 A study of Wordsworth
 T. S. Eliot "The Waste Land"
 九〇七六〇 杉本清美
 九〇七六一 鈴木貴子
 九〇七六二 永田弥生
 九〇七六三 不破純
 九〇七六四 松野久仁香
 九〇七六五 松本幸代
 九〇七六六 水野順子
 ドイツ文学専修
 九〇七六一 磯貝麻美 ドイツ語の述語タイプ
 九〇七六二 小田久美子 THEODOR STORM 「IM-
 MENSE」について
 九〇七六三 栗田千波 ボルヒェルトの短編小説の技
 法について
 九〇七六四 杉本清美 グリム童話について
 九〇七六五 鈴木貴子 ヘルマン・ヘッセにおける自
 己自身への道について——
 「デミアン」より——
 九〇七六六 永田弥生 現代ドイツ語の haben の用
 法
 九〇七六七 不破純 作家エーリヒ・ケストナーの
 土台となった子ども時代につ
 いて
 九〇七六八 松野久仁香 ヨハンナ・シュピリの『ハイ
 ジ』について
 九〇七六九 松本幸代 現代独語の構文の特徴につ
 いて——Max Planck "Wissen-
 schaft und Glaube"を資料とし
 て——
 九〇七七〇 水野順子 Adalbert Stifter の作品にお
 ける

る人間と森との関係について

九〇七三二九 三宅 絵里

「モモから学ぶこと」——ミ

九〇七三三〇 山崎 由香子

「モモ」から学んだの「モモ」よ

九〇七三三〇 山崎 由香子

り——

九〇七三三〇 山崎 由香子

シユティフター『番木林』に

九〇七三三四 横木 宏子

おける森の意味

九〇七三三五 米田 雪子

Hermann Hesse の Siddhartha について

九〇七三三五 米田 雪子

ライナー・マリア・リルケ

九〇七三三三 吉川 英一

『神様の話』について

九〇七三三三 吉川 英一

ベルトルト・ブレヒトの演劇

九〇七三三四 高橋 明雄

と戯曲の改革について

九〇七三三四 高橋 明雄

『トニオ・クレーガー』につ

フランス文学専修

九〇七三〇一 安藤 和子

ヴィクトル・ユゴーの詩につ

九〇七三〇二 犬飼 淑恵

いて

九〇七三〇三 犬飼 淑恵

Chateaubriand 『ルネ』

九〇七三〇四 太田 恵子

サン・テグジュペリの『星の

九〇七三〇五 大矢野 容江

王子さま』の『寂しき』につ

九〇七三〇六 木村 崇

いて

九〇七三〇六 木村 崇

プルースト論

人の詩（「死」）

九〇七三〇七 幸塚 祐子

ジャン・ジャック・ルソー論

九〇七三〇八 笹俣 正子

JEAN GENET

九〇七三〇九 清水 琢磨

『Emilie Zola の文学と彼の日

九〇七三一〇 杉山 裕香

本における受容史』

九〇七三一一 長倉 和子

スタンダール『赤と黒』

九〇七三一一 長倉 和子

マリヴオーの作品に見られる

九〇七三一二 成藤 晴美

女性の描写に着目して、それ

九〇七三一二 成藤 晴美

を基にフランスの女性観を探

九〇七三一三 原 千晴

る

九〇七三一三 原 千晴

サルトルについて

九〇七三三四 原田 未央

ポーマルシェ『フィガロの結

九〇七三三四 原田 未央

婚』——一八世紀の墮落貴族と

九〇七三三五 土方 久美子

市民階級——

九〇七三三五 土方 久美子

ジャン・コクトー研究（詩）

九〇七三三六 藤田 智子

と（死）

九〇七三三七 牧野 悦子

二〇世紀・シユールレアリス

九〇七三三七 牧野 悦子

ム

九〇七三三八 安井 太一

アルペール・カミュ『裏と表』

九〇七三三八 安井 太一

について

九〇七三三八 安井 太一

シモーヌ・ド・ボーヴォワール

九〇七三三八 安井 太一

『おだやかな死』論

九〇七三三八 安井 太一

ボードレール『パリの憂愁』

九〇七三九 山崎 博子
について
フランス革命とヴォルテール
との関係について

八九七〇二 青木 卓之
コクターについて

八八七〇五 河 龍雄
リラダン「未来のイヴ」

八八七三三 浜島 直樹
法王庁の抜け穴 アンドレ・
ジイド作「無償の行為につ
いて」

中国文学専修

九〇七四二 池 田 典隆
中国における諫争論の展開
——特に春秋・戦国時代の儒家
において——

九〇七四二 伊 藤 公 一
『三国志演義』における女性の
立場——貂蟬をめぐる——

九〇七四三 井 上 知子
『沈淪』における孤独感につ
いて

九〇七四五 加 藤 愛子
陰陽のシンボリズム

九〇七四六 加 藤 亜希子
劉備玄德論——三国志演義が
彼に求めたもの——

九〇七四八 児 島 正弥
中国における少数民族への蔑
称について

九〇七四九 毎 木 猛
張藝謀監督に於ける中国映画
について

九〇七四〇 齊 藤 陽子
『駱駝祥子』における白と黒
のイメージについて

九〇七四二 酒 井 和人
墨家の科学技術
中国の「鬼」

九〇七四三 武 智 誠
「人間 曹操」史実と詩の両
面から彼の人間性の本質を追
求していく

九〇七四四 竹 原 まさよ
日本における漢字の受容——
身体語を通して——

九〇七四五 谷 口 智子
史鉄生論——その自然描写に
ついて——

九〇七四七 松 崎 あかね
曹植詩の表現分析

九〇七四八 松 本 恒二
笑府——江戸小咄との交わり——

九〇七四九 南 明宏
『儒林外史』に於ける人物考

九〇七五〇 宮 地 賢一
老舎の女性観

九〇七五二 村 井 亜紀
『辺城』論——沈從文の描いた
人々——

九〇七五三 森 光代
趙樹理の作品展開——ワンパ
ターン方式が補えるもの——

八九七四七 緒 方 哲也
介音発生の一試論

「ワイトゲンシュタインのパラドックス」をめぐる

九〇P四一〇六 梶 浦 有一郎

S・A・クリプキのワイトゲンシュタインのパラドックスはこういうことである。たとえば私たちが通常足し算を行う場合、「+」の記号によって $1+1=2$ 、 $1+2=3$ 等々と計算を行う。そしてこれがもつと大きな数の組み合わせであつても、私たちは迷うことなく加法の「規則」に従つて計算してゆけるだろう。そしてこのことは至極自明のことであると思われる。ところが私たちは現実には有限の足し算を過去においてしたことがあるだけであり、過去の計算だけでは新出の計算例に対していかに解答したらよいか、ということとは全く決まらないのである。すなわち、過去において一方が57より小さい数の組み合わせの足し算しかしたことのない人にとっては「+」の記号で意味していることは

もし $x \neq y$ ならば $x \oplus y = x + y$

そうでなければ $x \oplus y = 5$

によつて定義される「 \oplus 」の記号を意味しているかもしれないことになるかもしれないのである。そしてこの行為の

「規則」性に関する懐疑は完全に一般性をもつと考えて、クリプキは私たちのいかなる行為も「暗闇での跳躍」と呼ぶのである。私たちは何も盲目的に足し算をしているつもりはないのでこれはパラドックスであらう。

私たちがこのパラドックスをかかえつつ現実に困つていないのは次のように問題が解消されているからだとかクリプキは考える。すなわち、私たちの行為がいかにひとつひとつ盲目的であらうとも、「共同体」の中で共同体のメンバーがお互いにお互いの行為を認め合つていくかぎりにおいて、私たちの行為は正当化されているのだと考えられるからである。たとえば $68+57$ に対して 125 と答えたときに私たちは相互にそれを正しいものと認めあつていくことにおいて私たちの行為は正当化されているのだと考えるのである。逆にもし $68+57$ に対して 5 と答えることがあればその行為は正当化されないと考えるのである。私たちの行為は依然として盲目的ではあるものの共同体の下でその行為を眺めるのであれば、そうした行為も正しいとか誤つているとか言

いなる状況になり、私たちは救われている、ということになるのである。また、共同体の下でのみ私たちの行為は正しいとか、誤っているとかがいいうる状況になるのだから、共同体から孤立させた個人の行為の意味規則については、正しいとか誤っているとかが言うことは無意味であると考え、このことを他でもなくウイトゲンシュタインの私的言語不可能論とクリプキは考えるのである。

ところでこの共同体の考え方では、68+57に5と答えることがあつたとしても、共同体のメンバー同士がこの答えを相互に認め合つてしまえば68+57=125という計算は正当化されてしまうことになるだろう。するとここで妙なことが生じる。というのもこれでは「共同体がするようにする」ことが本来盲目的であるはずの行為規則になつてしまい、パラドックスそのものが消え失せてしまうのである。この点に注意を払いつつクリプキの「共同体」からウイトゲンシュタインの「言語ゲーム」への立ち返りが必要となつてくる。すると次のようなことが見えてくる。すなわち、行為規則そのものがいかなる規則であるのかということが問題である限り、ある特定の規則を有した共同体を指定させること自体が「できない相談」ということである。この規則のパラドックスを解消させるにはこのような指定された共同体ではなく、私たちの生きた言語ゲームへと解消させなければならぬ。しかしパラドックスの発端である私

たちの言語ゲームにパラドックスを解消させるということとは、懐疑的ではあつてもクリプキのような懐疑論としてのパラドックスはそもそも存在しないことを意味する。また私的言語の問題ももっと微妙な注意を要することがわかつてくる。いずれにせよ事態は錯綜を極めているのである。

プラトンの言語哲学について

六二P四〇六八 堀脇 宏 之

本論文は、プラトン『クラテュロス』を基にして名の正しさについての考察を目的とする。「クラテュロス」では、名の正しさを有するものそれぞれが本性において備えているとみなす説と取り決めや慣習であるとみなす説とが対置されている。この二つの説が以下のように検討されることになる。

第一章では、名と実在との関係を本性的なものでない、つまり、取り決めや慣習、とみなす通常ヘルモゲネスの conventionalism と称せられている説がいかなる主張であるか、を明らかにする。この説によって名と実在との関係が本性的なものでないと述べられる場合に挙げられるのは固有名と外国語である。つまり、固有名をつけ変えることができることと実在につけられている名が国ごとに異なることが名と実在との関係が本性的なものでないことの例として用いられている。この二つのことは、一個人による恣意的な名の制定までもが可能である、という主張に基づいて説明される。

第二章では、第一章で示された conventionalism が相対主義に陥つて示し、相対主義の欠点を示すことにより、一個人による恣意的な名の制定までもが可能である、という主張は正当な主張でないことをまず提示する。そのため、相対主義に陥つてしまふ conventionalism に代わり、名と実在との関係を自然本性的なものであるとみなす自然説の立場から名の正しさが考察されることになる。自然説では、名は一種の道具である、とされる。道具の製作は種類に対応してなされることであり、感覚的個物に対応してなされることではない。そのため、感覚的個人に対応してつけられる固有名をつけ変えることができるとしても、名と実在との関係は自然本性的なものでない、と主張できることにはならない。また、実在につけられている名が国ごとに異なることは自然説では音や綴として現われていることが異なるだけであるとされる。

第三章では、第二章で提示された、名と実在との関係は自然本性的なものである、ということは、いかにして自然

本性的であるか、ということを明らかにする。そのために、まず取り上げられるのは固有名である。固有名の分析によつて、名は事物の有性を明示する、ということが提示される。つまり、事物がいかなるものであるか、を名が明示することが、名が自然本性的な正しさを備えていることになる。その場合に、有るものそれぞれがいかなるものであるか、を明示するのに他の名に拠つて明示する名があるだけでなく、他の名に拠つては明示することのない最初の名もあることになる。最初の名において名が事物の有性を明示することは事物の有性の模倣によるとされる。そのため、字母や綴を用いての模倣物が最初の名であることになる。

それは、名と事物とは類似性があることもある。このことが、事物の色や形の模倣物である絵画との類比で説明される。

第四章では、第三章で示された、名と事物との類似性が検討される。つまり、事物の有性の模倣物である名の類似性をどのように考えるか、ということが検討される。模倣物というものは模倣の原物である事物の性質をことごとく備えたものであることはできない。模倣物が模倣の原物である事物の性質をことごとく備えているならば、もはや模倣物であるとは言えなくなるためである。そのため、自然本性に合致しない字母が名に割当てられていることがありうることになる。その場合に、名が事物の有性を明示する

ためには約束や慣習が不可欠となる。しかし、名が事物の有性を明示する手段としては、合理的根拠のない恣意的な約束や慣習よりも類似性の方がより優れている、と結論が出される。

中流階層とその生活意識

九〇S五一〇三 稲葉敬子

以前しばしば「一億総中流時代」という言葉を耳にした。世論調査を行うと大部分の日本人が、自分が中流階層に属すると答えることから、これは日本が平等で豊かな社会になったためであろうと、よく取り上げられた言葉である。

今でも、依然として全体の八―九割を中流階層が占めている。しかし豊かさ論議が盛んであったり、宗教ブームがおきたりする現在の状況を見てみると、果たして人々が本当に豊かさや満足感を感じているのか、疑問に思えてくる。

そもそも中流階層とは、どういった存在で、何を意味しているのだろうか。結論を言うと、これは個人の主観的判断に基づく意識階層である。このためか、客観的要因だけにより中流階層を完全に把握することは出来ないようである。これまでなされた研究を整理すると、四つに分類できるが、このうち個人の属性及び社会の変化と、中流意識の間には、ある程度の関連性は認められたものの、十分とは言えず、他にもっと心理的要因にも注目すべきであることが指摘されている。また、階層構造の変化が、中流意識

の増加をもたらしたとする説は、構造の変化がおきた場合とそうでない場合の「中」の分布状況の計算などによって、中意識とあまり関係がないであろうことが判明した。そこで最も注目されるのが、四番目の「意識システム」による説明である。この方法を用いて行われた研究に、盛山和夫の「生活水準の「中イメージ」の断続的変化説」がある。彼はこの仮説により、中流階層の分布形態の時代的变化を、豊かさの観念の時代的变化として見事に説明している。

このように見ていくと、中流階層を解釈する為には、意識面に着目することが重要であると思われる。この意味において、盛山の説は非常に有効であると思われるが、ただ、階層の判断過程を単純化しすぎている点が気になる。彼の説では、階層帰属意識は「所得と財産を主変数とする階層基準のイメージ」と「自分の位置」との関係によって決まるとしている。つまりここでは、階層判断を行う際の意識には触れているものの、階層イメージの形成過程や自分の位置の認識過程については述べられていない。また、階層

基準を経済的要因だけに絞ったのも、簡略化のしすぎと思われる。階層帰属意識も、生活意識の一つである以上、当然日常生活において経験された様々な要素が、複雑にからみあって形成されたものであろう。であるから、階層意識を捉えるには、もつと生活の実態に即した、ミクロなアプローチを行ふべきであると考え。

以上の考えから、私は中流階層の実態を解明していくにあたり、盛山の仮設に新たな過程、「階層基準設定過程Ⅱ 社会状況」と「自らの位置の認識過程Ⅱ 生活状況」の二つを加えたモデルを提示する。個人の属性・条件がこの二つの過程を通じて変化し、形成された豊かさのイメージとも言える階層基準と、自分の生活状況のイメージとの比較、あるいは複合体が、階層帰属意識となるのではないだろうか。

過去の研究データなどを用いて、このモデルの検証を行なったところ、妥当な仮設であると思われた。そこで、このモデルに基づいて、中流階層の生活意識の分析を行なった。結果、現在は価値の変動期であり、このため階層意識も曖昧でつかみにくいものとなっているようである。より属性に近い具体的目標と、大まかな豊かさのイメージとの間には大きな隔たりが見られた。生活水準が上昇し、新しい価値基準のイメージが広がったものの現実には実現することが難しい。このため手近なサービス消費に満足を見出

しているようである。また生活水準が上昇し、満足した暮らしを送っているものの、上には上の生活があることも知っている。そんな状況の中で自分の生活を定義しきれない状態。これが現在の中流階層の生活意識なのではないだろうか。

遊・非行・俗——子どもの世界から——

九〇S五一三八 宮澤 緑

「自転車を盗まれた」という話をよく耳にする。こういった盗みの動機は、「ちよつと借りるだけ」「スリル・好奇心」といわれている。これらから、子どもに、盗みを「悪」とコントロールするはずの規範意識の発達や、道徳教育の不十分さを感じる。しかしこれは、社会化や人格形成の上で大きな役割を担う「遊び」の変化の結果といえるのではないだろうか。そこで、いわゆる「非行」といわれる子どもの逸脱行為を対象にするのではあるが、それを非行問題として扱うのではなく、R・カイヨワの「聖・俗・遊」理論を分析枠組とし、子どもにとってはあくまでも「遊び」の世界での行為が、大人の価値基準によって、「非行」とレッテルを貼られて処理されうる、と考えるのである。

カイヨワは「遊び」を、自由な・隔離された・未確定な・非生産的な・規則のある・虚構の活動、と定義した。「遊び」は、気楽で自由な活動領域である反面、極めて脆弱な世界である。「聖」や「俗」から注意深く隔離されていないと、「遊」は簡単に崩壊してしまう。遊びと社会生活、特に遊

びが実生活Ⅱ「俗」から隔離されることをカイヨワは強調した。「遊」は「俗」に對置するものであり、既成の支配秩序や価値序列を相對化し、的確に批判するパスベクトルを提供する上で、重要な役割を果すものである。

近世以降、カイヨワが定義するような「遊び」は、子どもの領域でしか成り立たない。なぜなら、子どもはまだ実生活——労働——の中に取り込まれていないからである。

「遊び」は真面目な大人がするものではない、生産活動Ⅱ労働こそがすべての活動を評価する基準である、とする風潮。これを踏まえ、「遊」Ⅱ子どもの世界、「俗」Ⅱ大人の世界とし、「遊」を取り巻く状況と、子どもの逸脱行為との関連性を考察すること、そして、子どもの逸脱行為を問題にすることによって、大人、さらには現代社会システムそのものへの批判を試みるのが主題である。

八〇年代以降の非行（主に初発型非行）は、子どもの意識や態度に根差しており、意図的に計算された行為として理解する必要があり、今までの非行理論だけでは充分に理

解できなくなった（その結果、大人たちは深刻な危機意識を持ち、非行は重大な社会問題として形成されていった）。これらの行為は、「遊びの貧困」「遊」と「俗」との相互浸透の結果として考えられる。この状況から、遊びの純粹性が実生活の論理によって汚染され、非行でしか遊べない子どもたちの実情（非行の遊び化）と、管理が行き過ぎ、子どもたちのいたずらが、非行というレッテルのもとに処理されている実情（遊びの非行化）を指摘できる。これでは「俗」とは別次元の「遊」の世界を創ることはできない。子どもたちは大人の生活論理が侵入しないように、より現実離脱した遊びの世界に入ろうとする。あるいは、自分たちだけの隔離された世界、ユートピアの確立、恒久的な現実離脱の状態を目指しているのかもしれない。自分たちだけで自発的に創ることができると世界が、逸脱行為といった大人が最も嫌がる領域になりうることを予想されるのである。

子どももの逸脱行為の根源は、遊びの貧困化にあることを大人は認識する必要がある。遊びは、実生活と並立する独自の活動領域であり、実生活と同等の比重を持つ活動として扱うこと、そしてそこから現実への対応の仕方を考えることの重要性を述べた。大人たちは今日の非行状況を危惧し、より一層医療へのまなざしを注ぐことに躍起になっている。しかし、同じ行為をカイヨワの視点から見ると、子

どもたちの現代と、そこでの大人の生活への反発に基づくシグナルが読み取れる。子どもたちの逸脱行為の中に込められた暗黙の意味を推測し、社会全体の問題へとフィード・バックしてゆく必要、換言すれば、現実を「遊」の視点から見直す必要を示唆した。

伊勢国智積御厨について

九〇H六〇〇八 木村賢司

現在、伊勢国智積御厨については、二・三の研究しか発表されておらず、同御厨の全体的な姿はほぼ窺えるものの、伝領・相論に関する課題については、まだ研究される余地がある。

本論は、智積御厨の一荘園としての姿を把握することから第一の目的とし、先行研究に助けられつつ、十三世紀末期から十五世紀末期までの伝領・相論に関する約七十通程の文書（主に「醍醐寺文書」、「口宣繪旨院御教書案」）を解釈したものである。

第一章では、伝領関係文書中の人物を中心とした考察により、伝領過程、またそれに関わる事柄について述べた。「冷泉局」↓室町家↓中御門家↓醍醐寺理性院（宗助）

↓中御門家

右の如く、当御厨領家職は伝領されるに到った。一時期、南朝方に加担していたと考えられる中御門宗兼が、北朝方に「斬首」されたことにより、中御門家は当御厨を理性院宗助に一期分として譲与している。しかし、在地の実際の

支配権は中御門家にあり、室町家から譲与された十四世紀前半から、以後長年、中御門家が当御厨の領家として支配してきたと考えられる。

また、この室町家から中御門家に伝領される過程において、「室町三位季行」の違乱が、数度に渡って繰り返されている。その都度、違乱を退ける「後醍醐天皇繪旨」が下されているにもかかわらず、季行は違乱を続けている。

つまり、これらの背景として、南北朝動乱の影響が中御門家の智積御厨支配においても及んでいたと考えられる。

そして、十四世紀末期には、大日寺（現、四日市市寺方町）に対する年貢請負いの和与、十五世紀前半以前には、智積御厨中御門家領が三分一に減ぜられており（三分二は大慈庵（相国寺塔頭慶雲院末寺）領になったと思われる）、この二つの事柄の背景には、十五世紀全般に渡って見られる大日寺・大慈庵両者と中御門家方との相論がある。

第二章は、それら両者との相論を中心に、両者の関連性を含めて考察をした。

大日寺の中御門家方に対する相論の一番の根拠は、「室町三位季行卿寄附状」によるものであり、大慈庵においては、寛元元年（一四六〇）年までの五十年間の年季売り契約を中御門宗量と交わした、とするものであり、両者ともに智積御厨全領を主張している。

また、大慈庵の主張する契約が成された時期は、応永十八（一四一一）年と判断でき、この年は、（一）中御門家と大日寺との相論、（二）宗量の勅勘蟄居、といった事柄が起っている。他にも、文明十七（一四八五）年に大日寺、同十八（一四八六）年に大慈庵が、ほぼ同時期に、両者ともやはり、当御厨全領を主張する訴えを蔭涼軒主に起こしていること等からも、大日寺・大慈庵両者は、中御門家の智積御厨支配に対して、何らかの関連性があったものと思われる。

そうした中、両者との相論においても、室町幕府から中御門家に智積御厨安堵の御教書等の文書が下されているにもかかわらず、両者はともに、当御厨全領を主張し、大変執拗な相論であったことがわかる。

以上の如く、本論は第一章で伝領、第二章では相論を中心とした考察を行った。そして、結果として以下のことが認められる。

領家中御門家の智積御厨支配は、南北朝動乱・室町幕府の衰退、と当時の情勢に少なからず左右されながら、決して安泰なものではなく、特に十五世紀に入ってから、さ

らに支配力低下の姿が窺える。

名古屋市における地下街の形態とその機能

九〇H六二〇六 加藤 武 司

都市における地下空間利用が注目され始めたのは一九五〇年代後半からであり、高度経済成長期と重なって都市の立体化は地下への拡大を見せるようになった。このような動向は名古屋市においても顕著であり、地上商業機能の代行として形成されている名古屋市の地下街は、都市の一部として重要な役割を果たしている。

名古屋市には主に栄地区（地下鉄栄地下街、サカエチカ、セントラルパーク地下街）と名古屋駅地区（サンロード、新名フード、ミヤコ地下街、地下鉄名駅地下街、テルミナ、エスカ、ユニモール）に大規模な複合地下街が形成されている。「地下街」とは、定義上、公共敷地下に建設された公共通路及びそれと一体となる地下施設であり、名古屋市の両地区では、管理会社の異った複数の地下街とビルの地下フロアとが複雑につながり合っている。地下街の形態は地上の道路形態に影響されるところが大きく、栄地区では江戸時代の城下町の名残りで、基盤状に整理された道路形態から地下街は単純な直線的通路である。一方名古屋駅

地区では地上の道路形態が規則的でないため、全体として見通しの悪い通路が形成されている。これは地下街の迷路性と災害時のパニック化を強める一つの要素となっており、加えて名古屋駅地区では、通路の狭さ、近隣ビルとの接続の多さから、栄地区より遙かにこの傾向が強い。その形状の違いは建設時期に大きく関りを持ち、地下街に対する規制強化以前に形成された名古屋駅地区と、それ以降に形成された栄地区では、建設目的も違う（名古屋駅地区のサンロードは地上の交通緩和のためであり、栄地区の地下鉄栄地下街は地下鉄の駅付属としてである）。

交通機関から見た場合、両地区は共にターミナルの機能を有しているが、その規模は名古屋駅地区の方が遙かに大きい。また栄地区は一カ所に駅が集中しているのに対し、名古屋駅地区は地下鉄名古屋駅とJR、近鉄、名鉄の各駅との間に地下街が立地していることから、鉄道利用者（主に栄に勤務する名古屋近郊の通勤者）が地下街を通行する機会は多分にあると言える。

店舗業種では、名古屋駅地区に食料品（主に名古屋の名産品）を扱う店舗の割合が高い。栄地区においてこの傾向は弱く、他地域からの往来の多い名古屋駅の特徴を活かした店舗構成となっている。また飲食店の分布が栄地区に多く見られ、名古屋駅地区では地下街と接続しているビルの地下フロアーに集中していることで、平日の昼の利用者の流れに大きな違いを見せている。名古屋駅地区の場合、接続ビル（主に地階はオフィス）の地下フロアーが地下街並みの機能を持っているため、地下街は通路としての機能が高いようである。

両地区において地下街は高い商業機能を持っているわけだが、地下街に適さない業種、特に金融、旅行代理店、居酒屋、病院などは、地下街店舗の営業時間や宣伝効果の問題から地下街への出店があまり見られない。地上における商業機能は、全体として栄地区では地下街と共存共栄の関係を保っており、セントラルパーク地下街とその地上空間はそれぞれ異った業種構成から、上下の人の流れが活性化されている。一方名古屋駅地区では地下街と独立してしまっており、ユニモールでは地下単独で商業空間を形成している。

地下街利用者に対するアンケート調査の結果によると、地下街店舗の扱う商品の偏りによって、性別、年代による利用分けがされているようである。また地下街が全天候型

であるとところに有利性を感じている一方、閉鎖的な空間から生ずる不安や、方向感覚の低下に対する対策の不十分さへの疑問は多くの利用者の心理にあり、今後改善の余地は多く残されている。

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論

九〇七〇四〇 豊田有紀

宮沢賢治は、森羅万象はもとより自己自身をさへ仏（全ての物事の根源）の意思の各々の現れであると認識していた。そしてその現れとは「すべてのものは悪にあらず。善にもあらず」という、彼の書簡の言葉からも分かる様に、善悪二重性を持ってして初めて捉えられるものだったのである。

北方へ漁に出たまま帰宅が遅れているジョバンニの父には、投獄されているという町の噂もあり、その事が原因で彼は友達からいじめられる。中でもザネリは「らっこの上着が来るよ」という一言を再三浴びせ、ジョバンニを深く傷付ける特別な人物である。何故ザネリはこれ程までにジョバンニを徹底的に揶揄する無類な存在として描かれなければならなかったのか。又一方でこの意地悪なザネリの命を救う為に一体何故ジョバンニの敬愛するカムパネルラが自らの命を捨てなければならなかったのか。作品の背後にいろいろもかかわらず、ジョバンニやカムパネルラの心情や行動に強烈な影響を及ぼす重要な人物だと思われるザネリ

の存在意義を考えていく事を通して、テーマに近づいて行こうと試みた。

ジョバンニは病気の母の世話をしながら働く健気な少年である。しかし実はそのような彼の内にも、自己中心性・慢心・自己憐憫、といった利己心の様々な現れや、家業の罪（父の罪）という、人間であれば誰もが潜在的に持っている罪（存在悪のようなもの）が存在していたのだと考える。取り分け問題なのは彼自身がその事に無自覚、無反省であったという点なのである。自己の内に潜む悪を自覚していない、このジョバンニの性質は、善悪二重性を持ってして初めて捉えられる賢治の自己認識の一方の欠落を意味するからである。そこで作者はジョバンニ自身無自覚な彼の深層に潜む悪の体現としてザネリを設定しジョバンニがこの銀河鉄道の旅を通して、自分とザネリを一体化し、善でもあるが悪でもあるという自己認識を獲得していく過程をこの作品で描いたのだと考えるのである。鳥捕り、燈台守、かほる子達との関わりの中で、ジョバンニは自己の内に入

を軽侮したり邪険に扱うという卑小な一面が存在していた事を初めて思い知ったのである。恐らく彼は、現実世界で自分を揶揄し傷付けていたザネリの性質を、銀河世界では自己の内に確実に見出したに違いない。

ただし作者は、この銀河の旅に於てジョバンニに自己の内に潜む悪の認識だけをさせた訳ではない。「僕はもう(中略)みんなの幸のためならば僕のからだなんか百べん灼いてもかまはない」という旅の終りの決意からも分かる様に、彼の内には自己に潜在していた悪の認識と同時に、みんなのほんたうの幸への希求が芽生えていたのである。

ところが、この決意の後間もなく彼はカムパネラを車室から見失うのである。ただし二人の別れは死者と生者の別れ、ほんたうの幸の実践者と未実践者の外面的な別れに過ぎず、みんなのほんたうの幸への希望という共通の願いの下にジョバンニはカムパネラと勿論青年達とも、本質的、精神的にはどこまでもいつしよに行くことが出来たと考える。

石炭袋を通り現実世界に戻されたジョバンニには、ほんたうの幸実践の要求と、その内実は一体何かという作者の永遠の問いが託された。その為作者は現実世界でカムパネラにザネリ(ジョバンニの悪の体現)を救わせていたのである。蠅が自己の悪(殺生罪)を受け入れて初めて輝く星になれた様に、ジョバンニも現実世界で自己の悪(ザネ

リ)と一体化して初めてほんたうの幸を追求することが出来るからである。すなわちジョバンニの為にザネリは救われなければならなかったのである。結論として、作者はこの作品で、罪意識のない少年が、自意識下に潜む自己の悪を凝視し、それと一体化して初めて、みんなのほんたうの幸を追求して行くことが出来るのだという事を描いたのである。

『男衾三郎絵詞』の研究

九〇七〇六二 渡邊 則子

『男衾三郎絵詞』という作品は、物語の前半部分までしか現存していないが、その中で、主人公である「慈悲」は境遇と共に「からかみ」・「ねのひ」と名も変えられている。

それぞれの名には意味があり、「慈悲」という名は観音の申し子であることから付けられ、主人公である慈悲は、今後いかなる苦勞が待ち受けようとも観音の加護を受けることを保証されているといえよう。「からかみ」という名は、『清水物語』の諸本のいくつかにもみられ、「せつきやうかるかや(寛永八年しやうるりや喜衛門板)」にもみられるが、いずれの本の「からかみ」も侍女という意の女房であることは共通しており、この「からかみ」という名は、女房の名として広まっていたのではないかと思われる。よって、男衾三郎の妻は、慈悲の召使の身分に合ったこの「からかみ」の名を付け、また、慈悲を廐の水汲みに使う時には、さらに低い身分の名として「ねのひ」と名付けたのである。「ねのひ」という名が「からかみ」という名よりランクが下であるということは、本文中に「からかみといふ名をた

に心うしとおもひしにあまさへ、ねのひと……」と記されていることから明らかであろう。

変名によつて、主人公は今までの自分を名と共に消されてしまい、単なる身分の低い者と成り下がってしまうこととなる。そして、そのことは、そのような苦境から主人公が浮上し、自分をおとしめた者を懲らしめるというストーリーを構成するためのプロローグといえよう。また、一方的におとしめられ、名を変えられたことにより、人々の判官贖の心情に訴えかけ、ひいては読み手を作品に引き付けるという効果を生み出すことにもなるのである。

次に、この作品の人物の描写についてみていくと、吉見二郎の忠臣である宇動大夫正広と荒権守家綱の描かれ方、特に荒権守家綱の武勇にたけた有様などの詳しい描写を見ると、欠落している後半部分において、慈悲の力強い協力者として活躍すると思われるのである。また、公家的である吉見二郎一家と地方武士そのものである男衾三郎一家の対照的な描かれ方は、物語を単に面白くしているだけでは

ない。公家的な吉見二郎一家は武家社会の時代の弱者であり、その弱者を強者である男衾三郎一家が苦境におとしめていくという構造をもつことで人々のより深い同情を誘い、またもや判官嵐貞の心情に強く訴えかけているのである。

この物語は、何の力もない弱い女性が、観音の力や亡き父の霊力や、忠臣等の協力者によって救われ、幸福になり、逆に悪役である男衾三郎一家には罰がくだるというストーリーであることは、間違いないといえよう。だが、決して観音信仰がこの作品の主題ではなく、観音は、時代の弱者である吉見二郎一家の人間である慈悲が、強者である男衾三郎一家に立ちむかい、浮上する際の手段として置かれているとはいえないか。むしろ、この物語の主題は、時代の弱者も強者も関係なく、必ず悪は滅びるのであり、力のない者でも、善人であれば、必ず救われるということではなからうか。主人公である慈悲が、変名に伴って、一層虐待を受けたり、余りにも弱々しいという描かれ方をされているのも、また、吉見二郎一家が時代の弱者として描かれているのも、完全なる弱者とするためではなかったか。反対に、男衾三郎一家を時代には受け入れられるが、完全なる悪役としたて上げているのも、この主題によるためであったと考えられるのである。そして、この主題には、時代によって、虐げられている人々への救いも見えるのである。

John Keats の詩論研究

—Imagination の考察—

九〇七二一〇五 猪野 恵 也

詩人ジョン・キーツはその短い生涯において、まともな形として自己の詩論を著していない。しかし、大変魅力的な手紙がある。私は詩ももちろんそうだが、キーツの手紙に興味を覚えた。なぜならそこに、親類への愛情溢れる気づかい、恋人への悲痛な感情、そして詩に対するキーツの立派な態度を読み取ることができるからである。

私は詩論に関して、キーツのイマジネーション(想像力)に焦点をあてた。キーツは自己の想像力がファンシイ(空想力)、インヴェンション(創作力)等を含んでおり、それらが詩作に際して働き、その働き方は創作力が「北極星」であり、空想力が「帆」であり、そして想像力が「舵」であるとして述べている。その結果「船」である詩作が進むのならば、一体キーツの想像力、空想力とはどんな能力であるのか。創作力とは個々の作品の主題のことである。故に、私は想像力、空想力について明らかにし、作品と照らし合わせることにした。

第一章において、まずキーツの空想力について考察した。そして「睡眠と詩」においてその性質を見出すことができる。すなわち空想力はキーツに視覚的イメージをもたらすのである。さらにそれはキーツにとって喜びなのである。キーツはこの作品中、空想力がもたらす神話のフロラやパンの世界で妖精と夢中になって遊び、喜びを享受している。

またキーツには空想そのものを主題とした作品がある。この作品において空想力は視覚的イメージに加え、聴覚的イメージをもたらしている。これもキーツにとって喜びである。

二つの作品について共通して言えることはキーツの空想力がもたらすイメージ群は具体的でわかりやすいことである。ということは空想力が働いている間のキーツの意識は冴えているのである。

第二章ではキーツの想像力について考察した。この問題

については「睡眠と詩」におけるキーツの決意をとつかかりとしてネガティブケイパビリティ（消極的受容力）、そして詩的性格についての手紙に至るまでのプロセスを跡づけた。その結果キーツが意味するスペキュレイション、すなわち「観入」と訳せるような行為がキーツの重要な詩的性格であることがわかった。スペキュレイションとはある対象に合体することである。そしてその合体状態の中でその対象に関する物事を想起すること、この想起こそがキーツの想像力なのである。

まとめてみると、「舵」である想起が詩作の方向づけをして、「帆」である空想力がイメージ群をもたらすから詩作が進むのである。そこで私はキーツの詩作パターンを予想した。すなわち、一自己滅却、二対象との合体、三想起の作用、四空想力の作用である。

第三章では「小夜啼鳥に寄せるうた」を例として詩作パターン及び詩論の検証を行った。キーツはこの作品においてナイティングールとの合体を試みている。そして空想力と想起が見事に繰り返されておりなぜキーツの代表的な作品であるのがわかるのである。

対象との合体は空想力が働いた時のみ成就しているが束の間である。また同時に空想力はその最高点の働きを発揮するがそれが限界であった。結局、空想力は破綻しキーツにとって拠所とはならないことに気づくのである。

私はこの卒論で不十分であるかもしれないが、キーツの空想力と想像力について理解した。だが、空想力が破綻したキーツが今後どのような道筋をたどったのか気にかかる。そしてこの問題を今後取り組んでいきたいと思っている。

Charles Dickens の研究

—A Christmas Carol のこと—

九〇七—一四六 山口裕代

当然小説は、作者がいて初めて成立する。そして多くの場合、小説の中にはその作家の人生や思想が大いに反映されている。この論文で、私は十九世紀のイギリスの小説家チャールズ・ディケンズについて、彼の作品『クリスマス・キャロル』を通して研究した。

第一章では、作品『クリスマス・キャロル』と作者ディケンズについて考えた。

一八四三年、ディケンズは「クリスマス・キャロル」を執筆した。この作品の主人公は、けちな老事業家のスクルージである。ある年のクリスマススイヴに、彼の前に、彼のかつての同僚で今は亡きマーレーの幽霊と、過去・現在・未来の三人のクリスマスの精霊が順に現れる。彼らによってスクルージは、自分のこれまでの行いの冷酷さと、このような行いを続けた後の孤独で悲惨な死を思い知らされ、改心する。

ディケンズは一八一二年にポーツマス郊外で生まれた。

彼は幼い頃は幸せだったが、父親が借金に追われ、ついに牢獄へ入れられたことよって、生活が一変する。ディケンズ一家は中流階級から下層階級へと転落した。イギリスは階級意識の非常に激しい国であるが、十九世紀のイギリスは特に厳しい階級社会であった。この出来事は幼いチャールズに大きなショックを与えた。彼は靴墨工場で働くために家族と離れ、いつも孤独感にさいなまれた。またいつも空腹だった。彼の作品の中には食べ物の場面が多く出てくる。この作品もそうである。また彼が憧れた、明るく温かい家族の団欒の風景も多く登場する。

第二章では、主人公スクルージを改心へと導いた過去・現在・未来の三人の精霊のそれぞれの意義とスクルージに与えた影響について述べた。

過去の精霊の場面の重要なモチーフは「思い出」であった。またこの精霊はスクルージを、功利主義という世俗的価値観に穢れる前の清浄無垢の自己を持っていた頃の少年

時代に連れ戻し、現在の彼に少年スクルージのクリスマスを再体験させ、それによってスクルージに、立場の弱い人への共感的態度を復活させた。

現在の精霊は generous なものとして、いきいきと大らかに描かれていた。これは、クリスマスが楽しいものであることを示している。またこの精霊の役割は、スクルージの周囲にいる人々の目に彼がどのように映っているかを、彼らの会話を通じて主人公と読者に知らせることであった。こうしてスクルージは自分が変化することを素直に受け入れ、第三の未来の精霊をもすんで受け入れようとするのである。またこの場面の最後に登場する「無知」と「貧困」という二人の子供は、世界中のすべての犯罪を引き起こす社会の悪だとディケンズは言っている。

未来の精霊は、全体的に暗いイメージで描かれている。この雰囲気は、これまでに登場した過去・現在の二人の精霊とは全く異なり、我々が抱いている楽しいクリスマスのイメージとは正反対のものである。この暗さは、死の世界を暗示している。この暗さが恐怖となって、スクルージを改心へと導くのである。

三人の精霊はそれぞれの方法で、スクルージを改心へと導くことに成功したのである。

第三章では、主人公スクルージと作者ディケンズとの関連性と、ディケンズが主人公スクルージに込めた意味につ

いて考えた。

スクルージの中にはディケンズの性質がたくさん入っている。スクルージの幼年時代は、ディケンズ自身の思い出から成り立っている。また、けちなスクルージは、両親や親類の金銭的要求から逃れたかったディケンズ自身の姿であった。

ディケンズは、この作品を通して当時のヴィクトリア朝社会を批判した。当時産業革命の進展が特に急激であったが、その一方で悲惨な状態を引き起こされていた。中流階級の人々は自らの利益を追求し、貧しい者たちを顧みなかった。ディケンズは、スクルージを通して、当時の功利主義やマルサス主義を批判したのである。

以上のように、「クリスマス・キャロル」には、作者ディケンズの姿や考えが反映されていることが明らかである。そしてこの作品は、ディケンズから読者へのクリスマスブレゼントなのである。